て止まぬ著者のひたむきな探求の故にこそ、むしろ断定を避け蓋然性の含みを残すをより至当と観ぜしめるが如き事例もなしとしない。しかしそれはもとより本書のもつ優れて実証的な成果そのものの価値を些かも低減させるものではない。ひたすら体系化を志向する著者なればこそ、その求是の意欲が期せずして斯学の発展に寄与する成果を将来しているからである。ひとり東洋史学専攻者に止らず、学問対象を共通にする国史学研究者による評価が期待される所以である。専門領域を異にする筆者の批評紹介には穏当を欠く個所なきを保し難い。偏えに著者の寛恕を乞う次第である。

（A5版　五四一頁　索引八頁　一九七六年九月
吉川弘文館　六〇〇〇円）

（東北大学文学部教授・　　）

余英時著『論戴震与章学誠』

——清代中期学術思想史研究——

河田悌一

I

——東原（戴震）と実斎（章学誠）はまさに乾・嘉（乾隆・嘉慶、一七三六～一八二〇）の最高の両大師である。

と、かつて銭穆はその有名な『中国近三百年学術史』でのべた。この書の初版がでたのは一九三七年五月、日本が中国にたいして全面的な戦いの火ぶたを切る二カ月前のことである。

いらい四十年。中国（清代）思想史研究も着実に発展をとげ、戴震（一七二三～一七七七、同時代の思想家としてヨーロッパではルソーが一七一二年に生まれ、一七七八年に死んでいる）と章学誠（一七三八～一八〇一、ヨーロッパではカントが一七二四年に生まれ、一八〇四年に死んでいる）の思想像を浮き彫りにする、幾多のすぐれた成果が生まれた。そして戴震と章学誠を、清朝考証学全盛なりし時代にきわめて独創的な哲学を構築した思想家として並び称することは、ほぼ定着したといえよう。

がしかし、これまでの研究では、同時代に生きた戴震と章学誠とをそれぞれ独立したものとして別箇に論ずることが多く、当時の学界、思想界のなかで両者がいかなる交渉をもち、学問的影響

を与えたのかという絡み合いの側面から論じられることは、一、二を除いてほとんどなかったように思われる。

それに反して、題して『戴震と章学誠を論ず』どいう本書は、このすぐれた二人の思想家の深い絡み合いの様相をさまざまな角度から対照検討することによって、その思想的位相の類似点と差異を明らかにするとともに、中国思想史のパースペクティヴのなかに定立させる。のみならず、ヨーロッパの歴史家、歴史哲学との比較研究によって中国の歴史（哲）学がもつ世界史的な意味をも照射しようとする、野心作である。

このような点からみて、本書にひろく中国の思想に関心をもつ研究者に、大いなる示唆とつよい刺戟をあたえることであろう。

著者の余英時氏（Dr. Ying-shih Yü）は、一九三〇年天津に生まれ、現在、アメリカの市民権をもつ学者である。一九六二年、"Views of Life and Death in Later Han China"によって、ハーバード大学の博士号をうけ、一九六九年から現在まで同大学の中国史の教授（一九七三年から七五年まで二年間、新亜書院校長兼香港中文大学副校長として香港滞在、なお本書はこの時期の成果である）であり、今年からはアーサー・ライト亡きあとのイエール大学の教授をも兼任しておられる。元来の専攻は漢代史で、（漢代の）経済通商にかんする著者を有するなど幅広い研究①があるが、われわれ思想史を専攻するものにとっては、なによりも、銭穆教授の弟子として有名である。

さて、本書の内容構成は、内篇と外篇の二つに分かれる。内篇は、序言から結論まで七つの章から成り、戴震と章学誠の思想史的交渉と意義を論じる。さらに外篇では、四章すなわち四篇の既発表論文を集めて、戴・章両氏の思想とヨーロッパや日本の思想家の思想との、主として類似点などに論及する。専論たる内外篇二四八頁、および「附録」として戴震の未刊稿、章氏遺書逸篇などを付して、計三七三頁。

なお、本書は未見の読者が多いであろうことを予想して、紹介に重点をおく書評にしたいと考える。以下、章を追って著者の論じるところをひもといてみよう。

Ⅱ

まず第一章「序言」では、戴震と章学誠にたいする過去と現在の評価の違いから説きおこされる。著者は、同時代人の評価が戴震にたかく章学誠にひくかったこと、しかしその戴震の名望も考証学者としてのかれに与えられたものであって、「義理」（哲学）に長じていたから与えられたのではないとする。だから「義理」にすぐれていた章学誠は評価されず戴震も章氏を眼中においてはいなかった。だが現在、戴章両氏が顕彰されるのは、その義理の学によってである。そこには「学者」を評価する基準に転換があったのだ。とすれば、思想史的観点から戴震と章学誠をみた場合、一つには、かれらの学術のバックグランドが考証学にあったこと、二つには、かれらの哲学が考証学運動のために明確なある方向性を指示した、ということから、両氏は「清代中葉の儒学理論の代言人」だ、といえる。まさしくかれらが存在しなかったとすれば、乾嘉の考証学の中に意義ある発展の道程を（われわれは）見出せなかったろうし、清代儒学と宋、明「理学」との間に思想史的な内的連鎖が失なわれていたであろう。

こうした見地から、戴章両名をたかく評価し、本篇において歴史的心理的な二つの視角からかれらの思想を剔出しようと著者はするのである。

さて第二章「章実斎と戴東原の最初の面会」は、二人のすぐれた思想家の出会いが、いつ、どのようになされたか、を跡づける。これまで両者の最初の出会いを確定した説は出ていないのだが、著者は、『章氏遺書』逸篇（いま『文史通義』、古籍出版社、一九五六、北京、では「補遺篇」に収録）の「答邵二雲書」を根拠に、それを乾隆三十一丙戌（一七六六）年春夏の交、場所は北京の休寧会館、紹介者はかつて紫陽書院で教鞭をとっていた鄭誠斎（名は虎文）だ、と指摘する。そしてこの出会いこそが章学誠の学問形成に決定的な影響を与えたのである。当時、戴震は四十四歳、その思想は「義理こそ考覈の源」とする、考証より義理を重視する時期にあった。一方、二十九歳の章学誠は考証学全盛の学風の圧力下でもんもんたる心理状態におかれていた。したがって、章学誠は戴震晩年の「義理」を主とする学問的立場から、「義理への確信」を得るとともに、義理を空談してはならぬという戴氏の「考証学の挑戦」をもうけとったのである。また、そこで章学誠は、戴震の議論の博覧さと鋒先の鋭利さから、のちのかれに影をおとす「慚惕（はじおそれ）」と「寒心」を感受したのだ。このように推論して著者は以下のようにこの章を結ぶ。「この後、実斎の学術思想面における主要な発展は、ほとんどすべてかれと東原との最初の面会にさかのぼることができる」と。

第三章「儒家知識主義の興隆」は「清初から戴東原まで」との副題がつけられているごとく、思想史的な流れのなかで戴章両氏の位置づけをはかるものである。ここで著者は、清代の考証学は明代末の程朱の末学と陸王末学の義理の争いに遠源し、義理の争いから文献考証に曲折して清代儒家の全面的な経典整理運動がおこった、とする妥当な意見をのべる。そして、方以智、顧炎武、閻若璩などにも論をはせる。また、宋、明いらいの伝統的知識論を、「徳性の知」たる「尊徳性」――「約」と「一貫」、と、「聞見の知」たる「道問学」――「博」と「多識」、の二大潮流に分かち、清朝考証学は清初の顧炎武、黄宗羲、王船山という三大学者が「道問学」の立場を堅持し、学術が「虚から実」に入ったことによって、「尊徳性」から「道問学」へ変貌をとげた、とみる。それを著者は、儒家知識主義の興隆 confucian intellectualism とよぶ。かかる「理学」から「考証学」へ、「尊徳性」から「道問学」へ、の変化発展のなかに、戴震の位置づけをはかるのである。そうして戴震の学問の基本的傾向は、知識を伝統的な道徳の紛擾のなかから解放しようとするものであり、宋明いらいの儒家が知識の問題を論ずる際、まだ到達したことのない新しい地平を切り拓いた、と評価する。とともに、章学誠は「戴君の学術、実は朱子の道問学よりこれを得る」といい、龔自珍は清代の学術を「道問学」と規定するが、この両者のことばを合わせれば、戴震の近世儒学発展史上の中心意義を認めることができる、と指摘するのである。

かくて著者の眼は、第四章「章実斎の史学観点の成立」においてその「文史理論の成立過程」に向けられる。

章学誠は一七六六年、戴震に面会、義理の学により大きくめざめてのち、六年後の七二年中に二回（一度目は馮廷丞の寧波の道

署で、二度目は杭州の呉穎芳のところで、両者は出会う機会にめぐまれる。この二回の面談において、章学誠がさきに戴震から受けた強大な威圧感は、もはや喪失していた。いや逆に、「歴史は古を考えることに限定されず、古今の変化に通ず」べきものだとして、戴震の地方志にたいする考えに反駁するまでに、章学誠は成長していたのだ。さらに翌年、戴震が鄭樵の『通志』を考証が疏漏だ、と貶したことにたいして、㈠『通志』は史学の範疇に属するものゆえ経学考証を尺度にその得失は測れぬ、㈡『通志』の価値はその著者の「別識心裁」と「一家の言」にこそあるのであって、小過は問題にならぬ、考証学流の不毛なる博識より専門独断の「専家」のほうがまさる、と章学誠はいう。すなわち著者は、戴震の学問から刺戟をうけてのちこの六年間に、史学を立脚点として、戴震にたいして自信をもって立ち向かうまでに章学誠はなった、と分析する。

とすれば、その自信はどのように構築されたのか。それについて著者は、章学誠が経学と史学はどちらも窮極の「道」に至るべきもので高下の差はないと考えたこと、さらに学問に入るには考証でなくてもよい、「識解と大義」からでも入れるのだと考えたからだ、と解する。それはまた、一七七一年～七三年間とりわけ親密に交わった友人、邵晋涵の祖父の従兄（黄雲眉『邵二雲先生年譜』）、邵廷采（字は念魯）の『思復堂文集』を読んだこと、この数年間にかれの生涯の最大の著作『文史通義』の構想ができたこと、もあずかって力があった、という。そして章氏は自らの学の依るべき拠点を史学において、学は「性情の説にもとづく」ものであると述べて考証学（流行）の「風気を追う」ことに反対したのだ。しかしそうした章学誠もやはり（考証学の）「時代の子」であった。かれは一七七四年、『和州志』なる地方志編輯という文献整理の実際活動、広い意味での清朝風の学問に従事することによって、はじめて、「鄭樵は史識あるも未だ史学あらず、曾鞏は史学を具うるも史法を具えず、劉知幾は史法を得るも史意を得ず」と評するまでの立場に立つ。さらに一七八八年には、畢沅のために『史籍考』を編集する文献整理作業をへて「六経皆史」の見解を有するようになるのである。以上のごとく章学誠の思想形成をみてきて、著者は、章学誠の「義理」の学の発展は結局、文献整理という実際活動と結びついて形成されたものであり、かれの思想は戴震の経学考証と同じく、「儒家知識主義の枠組」のもとで作り出されたものである、ということを強調する。そして両者の相違点は、戴震が最後の拠りどころを六経に求めたのにたいし、章学誠はそれを歴史に求めたにすぎぬ、と論ずる。

では、いったい、その「六経皆史」説とはいかなるものか。つづく第五章で、「章実斎の『六経皆史』説と『朱陸異同』説」、がのべられる。

著者の説くところを要約すれば次のごとくになろう。すなわち、「六経皆史」説は顧炎武いらい戴震までの中心理論、「経学は即ち理学」（顧炎武の語）にたいする有力なアンチテーゼであり、かつ清代学術史上の一大創言である。章学誠はこの理論によって、㈠「六経載道」という従来の経書観を打破し、㈡六経は時間の制限を超越することはできぬ、つまり六経は三代の官師未分の歴史的進程（プロセス）を示すだけで、三代以後の道を六経からはさがし出せぬ、㈢「六経はすでに以て道を尽すに足らず」である以上、経学者が

考証訓詁に従事するのも無意味だ、ということ、を表明した。とすれば、三代以下の道はとうぜん歴史の中から求めねばならないのだ。つまり章学誠は韓愈の「経を宗として史を宗とせず」「道は六経にあり」とする「原道」の観点に異議を申し立て、「史に因りて道を見る」、道は歴史の進展のうちに不断に顕現する、という新たな「原道」の観念をうちたてた、と。以上の如くである。

かくして、こうした章学誠の「六経皆史」説はまさしく戴震の「字義制度名物に従事するに非れば、以てその語言に通ずるなし」とする考証学、「道は六経にあり」とする伝統的経学観、にたいする大いなる反論でもあったのだ。

ついでさらに、『文史通義』のなかで「六経皆史」説と並ぶ重要な理論、と著者の考える、「朱陸異同」論がのべられる。そこでは一七七七年に書かれた「朱陸篇」、その思想体系が完成した最晩年の一八〇〇年（死の一年前）の作「浙東学術」を主たる材料に、宋いごの学術の二大潮流——朱子学派と陸象山王陽明学派という思想史的流れ——のなかに、章学誠が自らの学と戴震の学をいかに位置づけているか、が考察される。章学誠は戴震の学の遠源を閻若璩、顧炎武をへて遠く「道問学」の朱子にもとめ、その学風は、「博雅」を尊び「経学即ち理学」とする浙西の学、と定義する。そして自らの学は、黄宗羲、劉宗周、王陽明、陸象山とさかのぼる「尊徳性」を強調するものであり、また「一貫」を尊び「専家」の史学を主とする浙東の学だ、と定義する。その際、章氏自身は、「浙東の学、性命を言うもの必ず史に究わむ、此れその卓る所以なり」との価値判断から「理学と史学を結合」する浙東の学の方が、「経学から理学を講じる」浙西の学よりすぐれている、ということを過度に強調して、浙西の学への反発を示すのである。

こうした章学誠の考えを著者は紹介し、章氏のこの思想史的見方——浙東に綿々たる史学の伝統が存在したことを無理に(?)誇張、顕彰し、浙西の学を低く評価する——は、浙西の学者たる戴震という学問的強敵が一貫してかれに心理的プレッシャーを与えていたことによって成立したのだ、と分析する。

とすれば戴章両者の思想史的な存在意義はどこに求めればよいのか。それを著者は次のように逆説的に結論する。すなわち、戴震は程朱を「敬を論ずるに詳なるも、学を論ずるに略なり」と批判しながらも、逆にかれは、程朱の「窮理致知」の論、「道問学」の伝統を徹底化した、また他方、章学誠は自らの学を浙東の史学にもとめ、陸象山、王陽明の教えにさかのぼりながら、その「尊徳性」の陸王を「道問学」の陸王に変え、性情を重視しながらも空理を談ぜざる「一家の言」をなした、と。

またこの章では、章学誠の「認同感」"sense of identity"からウイリアム・ジェイムスを想起してみたり、章氏の「高明」と「沈潜」という人間類型をジェイムスの"tender-mindedness"と"tough-mindedness"あるいは章氏のいう「博雅」と「専家」をアイザイア・バーリンの「きつね」と「はりねずみ」（「きつね」は多くのことを知り、「はりねずみ」はただ一つの大事のみを知る。邦訳『ハリねずみと狐』、中央公論社、一九七三）というカテゴリーに照応してみたりして、比較思想史的分析を加えていることなど含蓄があり、なかなか興味深い。

第六章「戴東原と清代考証学の学風」では戴震と当時の考証学

的学風との錯綜に注目し、その学問の重点の変化の道程をたどる。この章は外篇の「戴震の『経考』と早期学術の方向」とともに、本書の圧巻といってよい部分であろう、と私には思われる。著者は以下のように論じる。

戴震は考証学全盛の時代にあって、考証と義理とを兼備したまれな学者であった。だが、考証学によってのみ有名で、その義理の学を称賛したのは章学誠だけだった。たとえば、『原善』『論性』などの諸篇にたいして同時代の学者朱筠や銭大昕は「義理を空談す、以て作すなくして可なり」とのべた。そうした学問的雰囲気に戴震は存在したのである。とすれば、そのなかで戴震はどう生きたのか。戴震は一七五四年三十二歳のとき北京に上京、またたく間に、経学考証で最高権威になった。いらい晩年までの二十余年、考証学者として名声を保ったのである。それは、一つには、訓詁明らかにしてのち義理も明らか、とする立場に立って、考証は義理にとって必要にして欠くべからざる基礎と認めたこと、二つには十八世紀の中国においては、考証は一つの職業としてあったこと、による。

さて、戴震が義理を論じたことにたいしては二種類の反対がみられた。第一種は、伝統的な程朱の義理観から、戴震の異端ぶりを攻撃する、姚鼐、彭紹升、程晋芳、翁方綱ら、第二種は、訓詁考証の立場から戴震の義理の学に不満の意を唱えた上記の朱筠、銭大昕ら。それにたいして戴震は、前者の人びとには抗拒の態度をとったが、後者の人びとには正面切って反論せず、むしろその圧力を緩和するため『緒言』の書名を『字義疏証』と変えるなどの策を弄する。こうした戴震の苦心を、著者は十五、六世紀ヨーロッパの古典文献学者 philologist たち、たとえば Guillaume Budé に比せられる、としている。また戴震の程朱の義理にたいする見解については、次のごとく分析する。一七五四年上京以前かれは宋儒に反対していなかった。入都いご北京の考証学者（紀昀など）の反宋儒的風気に感染して反発が生まれ、五七年揚州で惠棟と会ったことから反宋学意識は強まった。そして著作で程朱批判をはじめたのは六九年の『緒言』からである。けれども、紀昀、惠棟は訓詁名物の立場からただ宋儒を攻撃し、「破るありて立つるなし」にすぎなかったが、戴氏は「破るあり立つるあり」で、「理」に新たな意味を付与し自分自身の義理の体系を形成した、と戴震をたかく評価する。

しからば一七五五年、「義理」「考証」「辞章」という三分法をもっとも早く（姚鼐に先だって）提出した戴震の、その思想発展はどのように時期区分されるのか。著者はそれを三段階に分ける。

一、一七五四年の入都、あるいは一七五七年揚州で惠棟と面談するまでの時期。この時期は義理を第一義の学、考証を第二義的なものとする。が、義理の面で心得はなく、程朱の義理と六経孔孟の言と分岐あり、とはそれほどつよく認識していなかった。二、一七六六年を分水嶺とする十年間で、惠棟一派と接近し宋儒の義理に反対し、考証と義理とを対等の地位に置く。また、『原善』初稿もでき、自らの義理の構想に着手。三、晩年最後の十年は、「義理は即ち考覈文章二者の源なり」とする義理重視の立場に立つ。が、名物訓詁は義理の是非を決定する唯一の標準だ、とものべて、考証を否定してはいない。まさしく新たな価値体系を確立した時期である。

以上のように戴震の思想を時期区分し、著者は、胡適が信用しなかった戴衍善が記す戴震の「臨終の言」――生平の読書、絶えて復た記せず、此こに到りて方めて義理の学は以て心を養うべきを知る――を、かれの最晩年の心理状態を示すものと認め、「義理をその心の最後の帰宿の地とした」と結論するのである。

第七章「後論」。以上のようにのべ来たった著者は、結論を出す。それを私なりに要約すればこういうことになろう。戴震と章学誠は、㈠ともに家庭環境が困窮していた、㈡科挙でしばしば挫折した、㈢故郷で学問基礎を確立してのち北京に赴き学界と接触をもった、㈣地方志などの文献整理で生計をたてた、㈤終身学問の追求を事としたが、正式には入仕しなかった、という五つの共通点をもち、清代中期の学者の一典型と認めうる。とともに、思想的にみれば、どちらも時代の学風に満足せず、義理の立場に立った。だが思想家たる人間類型として両者には差異がある。章学誠は一貫して(「きつね」の)時代になじまぬ「はりねずみ」であり、つねに心理的圧力をはねかえそうと世の中に激憤して公然と時代に挑戦し、著作を『文史通義』と名づけ義理の立場を鮮明にした。戴震も本質的には「はりねずみ」に属する人間で結局その立場を貫いたけれども、『孟子字義疏証』と名うって時代風潮に妥協をよそおったりもした、と断ずる。

かくて、近世儒学発展史からみて、考証学は宋明理学の義理の争いのなかから生まれたものであり、また戴章両氏は、どちらもその考証学の運動のなかから生まれたものだ、と結論するのである。

Ⅲ

以上のごとき内篇が終わって、外篇の第一章では、「戴震の『経考』と早期学術の方向」という題目で、戴氏の初期の思想が解剖され、またかれに大きな影響を与えたという、江永との関係が考察される。

すなわち、著者は、『戴氏遺書』未収の『経考』『経考附録』(両著は著者の時期区分でいう第一期、北京上京以前に書かれたもの)を分析することによって、戴震の初期思想は、陸王を排し程朱を主とし、朱子の「道問学」を服膺したものであり、また、「志は道を聞くに存す」という治学精神を具有していたこと、さらに論学の中心観念として、訓詁明らかにしてのち義理も明らかとする考えをもっていたということを実証する。そしてこの両書によって、戴震の後期の思想の発展はすべて理解しうる、と著者は考えるのである。

さらに両書にしばしば江永の名がみえることから、「清代学術史上の一大公案」ともいうべき江永と戴震の関係が論じられる。従来、両者の関係については三つの見解が存在した。㈠張穆、魏源、王国維の、戴震は早年に江永に師事したが晩年に師たる江永に背いた、という説。㈡戴震は江永を師として一生礼を尽した、という胡適の説。㈢「江戴の誼は師友の間にあり、未だ嘗て著籍して弟子には為らず」とする許承堯の説、である。これにたいして、著者自身は、江戴両氏が接触をもった時期と両者の間に正式の師弟関係があるか否か、を追跡し、従来信用せられてきた段玉裁の『東原年譜』(戴氏死後三十七年後の一八一四年、段氏八十歳

のとき完成）より、そのもとになった洪榜撰『戴先生行状』（戴氏逝去の翌年に成る）の方が信頼できうるとして、第三の許氏の見解に賛成する。以下、王昶『戴東原先生墓志銘』、銭大昕『戴先生震伝』『江先生永伝』、余廷燦『戴東原先生事略』、章学誠『書朱陸篇後』、戴震『江慎修先生事略状』などの資料を博引し、正式の弟子は「師の名諱を避く」、「弟子の名もし恰も師に同じなれば則ち当に改易すべし」という有名な（二程子と周敦頤、周正思と朱子の）例証を引いてこう論ずる。――戴震は早年に師の礼を以って江永を「江脩斎先生」と呼んだけれども、晩年には江永の学はもはや「道を聞く」に足らずと考え、「吾郡の老儒江慎修永」と呼んだのである――と。

この章の著者の推論を、評者の私は筆力足らずして十分に描写できぬが、実に見事な論証で、まさに密室でベッド・ディテクティブを読む感がしたことを告白しておく。

第二章「戴東原と伊藤仁斎」。一九二六年、青木晦蔵（一八六六～一九三一　元大谷大学教授）が『斯文』に連載した論文「伊藤仁斎と戴東原」に触発され書かれたもの、という。仁斎（一六二七～一七〇五）の『語孟字義』と戴震『孟子字義疏証』とは書名だけでなく、内容もきわめて似ているが、これは戴氏が仁斎の書を読んだからではないか、とする青木の疑問にたいし、著者は、仁斎の書が中国に輸入されておらぬという確証はないが、日本の古学派が起こる歴史的背景が、明末清初の中国の儒学の動向と思想史上きわめて類似しているということを指摘する。つまり中日両国の儒学の流れが照応一致すること、ゆえに仁斎東原両氏の説は、儒学が「尊徳性」から「道問学」に転換してのち必ずみられる内在的発展だ、と論ずるのである。

第三章「章実斎とコリングウッドの歴史思想」。これは著者が一九五七年、『自由学人』誌に執筆した、もっとも若書きのものであるが、「中西歴史哲学の若干の比較」との副題どおり、章学誠の思想を、E・H・カーによって「歴史哲学に重大な貢献をした二十世紀唯一のイギリスの思想家」と評されるコリングウッド（一八八九～一九四三）の代表作“The idea of history”1946（邦訳『歴史の観念』、紀伊国屋書店、一九七〇）と比較分析することによって、『文史通義』のもつ現代的意味をさぐろうとするものである。

そこで著者は、中国史学における人文の伝統、史学における言と事の合一、筆削の義と一家の言、という三つの角度から両者の歴史哲学を検討し、両者の歴史観はきわめて類似するところが多いが、その最大の共通点は「史学の自主」“autonomy of history”にたいする強烈な要求にある、と論じる。コリングウッドは、二十世紀の新理想主義“Neo-idealism”の重鎮として、近代史学思想の二つの重要な潮流である、ランケ流の「歴史主義」“historicism”とコント流の「実証主義」“positivism”にたいする反動と修正を意図して「史学の自主」を主張した。それと同じく、章学誠も、孔子、司馬遷などの史学の尊厳と独立という、人文の伝統を基礎に、清代の経学考証学にたいする強烈な抵抗として「史学の自主」を説いた、と指摘する。そして著者自身、現在なお章学誠やコリングウッドのいう史学の自主性が、史学が社会科学の応用学になってしまわぬためにも必要だ、とのべるのである。以上のような比較検討の作業は、はっきりいって私にとっ

てけっして理解しやすいものではなかったが、著者が史学の自立性という点で、章学誠とコリングウッドに大いなる共感を抱いているということは、容易に感得できた。

そして第四章「章実斎と童二樹――一つの史料の論証――」は、銭林の『文献徴存録』の邵晋涵伝にひかれる章学誠（章をその書では張につくるが）の記事に、かれが若いとき、童鈺（二樹）と交遊した、とみえるが、それが事実ではないということを論じたもので、資料に対する信憑性に注意を喚起する短文である。

――これで外篇も終わる。

Ⅳ

以上で大雑把ではあるが、本書ののべるところを要約した。いささか断章取義の紹介になったのではないかと恐れるが、読過の際感じた点をいくつかつけ加えて、この書評を終えることにする。

まず本書を通読して感じることは、著者の戴震、章学誠にたいする思想的評価、歴史的な位置づけが、きわめて妥当であり、読むひとを納得させるということである。すなわち、日本の一部「思想史家」に見られるがごとき、ある思想家の片言一句をとりあげ、それを演繹することによって「独創的」にして「特異な」思想家像をうちたてる、というようなところは、いささかもないのである。しかし、それでいて、本書がその方法の独創性と多くの新しい指摘にみちみちていることは、この要約紹介を読んだだけからでも、ある程度うかがい見ることができるであろう。さらに、もし、読者がこの書を一読されるならば、かならず、たんに思想の特徴を羅列するのみで事足れりとする平板な実証論文にはない面白さ、を感取されるものと信じる。

ではその面白さはどこにあるのか。その原因の一つは、思想に投影する心理的側面を重視する、著者の方法論にもとめられよう。つまり思想家の、時代風潮や他の思想家にたいする微妙な心理的な翳に、スポットライトをあて、それを糸のほつれをとくがごとく謎とき的に解明することによって、著者は自らの思想史解釈に大きな効果をもたらしているのである。

さらに著者は、じつに多くの資料や先人の説をあつめ、中国、日本、欧米（たとえば、P. Demiéville, "Chang Hsüeh-ch'eng and His Historiography," W. G. Beasley and E. G. Pulleyblank. eds, *Historians of China and Japan*, Oxford Univ. Press, 1961, David Nivison, *The Life and Thought of Chang Hsüeh-ch'eng* [1738–1801], Stanford Univ. Press, 1966）の各国語で書かれた従来の研究業績にあたってその成果を吸収し、その正すべきは正し、引くべきは引いたその上で、自己の説を構築している。ここにわれわれは、思想史研究者としての著者の誠実にして真摯な態度を見てとれるとともに、自らの発言にたいする自負をもうかがうことができるのである。

また欧米に住む中国人学者のつねとして、時には、孔子と司馬遷、ヘロドトスとツキジデスから歴史を論じ、清朝の考証学者を十六世紀ヨーロッパの古典文献学者に比し、中国文明とヨーロッパ文明を比較思想史のまな板の上にのせて論じる。こうした方法をあるいは好まぬ読者もあろうが、評者のわたしは、皮相なハイカラ主義ではなくして自己の有する伝統的文明を価値あるものとして捉えるわるびれなさ？に、中国人としての著者のアイデン

ティティーと自信とを感得させられた。だがその際、政治思想としてみたばあい明白であろう儒教の否定的マイナスの側面、経学のもつ限界性、に論及せず、二千年来の中国文明をささえてきた儒教の積極的側面のみを評価しすぎる、との印象をうけたのも事実である。

が、ともあれ、どのような書物も批判しようとおもえば、すべて批判できるものである。

かりにもし、本書に不満をもつひとがいるとすれば、それは、本書があまりにも思想の内在的発展に重点をおいて内側だけから書かれすぎ、外側つまり思想の社会におけるあり方、清代なら清朝統治下という時代の社会的環境と政治的風土のなかで思想家およびその思想が受ける限界性を指摘するという側面、が不足しすぎているということであろう。一例をとれば、乾嘉の考証学の隆盛についても、著者は、明末の朱子学派と陽明学派の義理の論争への反動によって「尊徳性」から「道問学」へという学術的変貌がみられた、という側面を指摘するのみにとどまる。けれどもかかる思想の内在的発展の視角とは別の観点も存在しうるであろう。たとえば、現代中国の代表的思想史家・侯外廬はいう。「十八世紀になると、いわゆる漢学が一世を風靡する専門の学となる。これは清朝封建統治勢力が相対的安定期にはいったことと密接な関係、とりわけ康熙いらいの反動的文化政策と密接な関係、をもっている」（『中国早期啓蒙思想史』四一〇頁）、と。こうした論にたいして、著者はやはり、答えをだしておくべきではなかったか。

さらにまた先の、著者の儒教にたいする包容的かつ肯定的姿勢に起因するのであろうが、章学誠が儒教倫理というイデオロギー面においてきわめて名教擁護意識の濃厚な、その意味において反動的といってもよい人物であった②、ということは、ほとんど考慮しておられないようにみえるのである。

したがって本書に嘱望する点があるとすれば、そうした思想の政治的社会的情況のなかでもつ意味、下部構造からの規定性について、一章でよいから論じてほしかったことである。

最後にもう一つだけ、本書で欠如している点をつけ加えておかねばなるまい。それは戴震の自然哲学とでもいうべき側面への言及の欠落である。さきにわたしは、本書内篇第六章および外篇第一章の、戴震にかんする論を、この書の圧巻だとのべた。まさにこの論によって、戴震の思想的発展の過程がこれまでの研究よりはるかに進んで明らかになったことは疑いない。しかしながら、そこでは戴震の義理と考証への学問的比重のかけ方の追求、に論点がかたよりすぎて、戴震の学問全般にたいする評価がなかったということも可能であろう。ゆえに戴震の学のいま一つの軸である、天文暦算などの科学思想への論及がなされていないのである。周知のごとく、十六世紀末から十七世紀初め、西欧からの宣教師伝来とともに西欧の科学技術（西法）が中国に導入された。そしてその西法は、戴震にも江永から伝授された――「清朝における本格的な科学思想の芽生えは、ようやくこの戴震あたりに見出せる」（近藤光男『戴震集』八頁、朝日文明選）――と、従来いわれている。したがって戴震における西法と科学思想についても「外篇」に一言あってしかるべきかと思われる。

以上、一、二批判がましき言葉を吐いたが、それは本書の存在価値をいささかもそこなうものではない。清朝考証学全盛期に義

理の学のもった意味を、思想史の内在的発展という流れのなかにさぐろうとする著者の主眼は、見事に成功しているのであって、著書と別の立場からは批判も可能である、ということをのべたにすぎない。

バランスのとれた確かな目くばりでなされる史料の読み、それでいてきわめて新鮮な思想解釈。

わたしは近頃よんだ専門の書物のなかでこれほど知的な刺戟をうけたものはない。本書は戴震と章学誠についてのすぐれたモノグラフィーである。今後、戴震と章学誠を論ずるものは、いや清代思想史を志すものは、本書を読まずして立論はできぬといっても過言ではなかろう。

① 外務省海外研修生としてハーバード大学に留学中の杉本信行氏を通じて、余英時教授の略歴と著作のコピーを送っていただいたので、主なる業績を挙げる。

A、英文著書。*American-Chinese Relations, 1784–1941, A Survey of Chinese Language Materials at Harvard,* (with Robert Irick and K. C. Liu), Harvard, 1960, *Trade and Expansion in Han China, A Study in the Structure of Sino-Barbarian Economic Relations,* Univ. of California Press. 1967.

B、中国文著書。『民主革命論』、自由出版社、香港、一九五四、『自由与平等之間』、同上、一九五五、『文明論衡』、高原出版社、一九五五、『方以智晩節考』、新亜書院香港中文大学、一九七二、『歴史与思想』、聯経出版、台北、一九七六。

C、英文論文。"Life and Immortality in the Mind of Han China," *Harvard Journal of Asiatic Studies, Vol. 25, 1964–65,* "Note on D. C. Twitchett's Financial Administration Under the Tang Dynasty," *Journal of the American Oriental Society,* 84, 1, 1964, "The Two Worlds of Hung-lou meng," *Renditions,* No. 2, 1974, "Some Preliminary Observations on the Rise of Ch'ing Confucian Intellectualism," *The Tsing Hua Journal of Chinese Studies,* N. S. 9, 1/2, Dec. 1975, "Food and Eating in Han China," in Chang, K. C., ed., *Food and Chinese Culture,* Yale Univ. Press, 1977 近刊。

D、中国文論文。「五四運動的再検討」『人生』七―一二「東漢政権之建立与士族大姓之関係」『新亜学報』一―二、一九五六、「一個人文主義的歴史観」『祖国』一四―一〇、一九五六、「陳寅格先生〈論再生緣〉書後」『人生』一九四、一九五八、「漢晋之際士之新自覚与新思潮」『新亜学報』四―一、一九五九、「文芸復興与人文思潮」『新亜書院学術年刊』一、一九五九、「従宋明儒学的発展論清代思想史」『中国学人』二、一九七〇、「方中履及其古今釈疑」『書目季刊』六―3/4、一九七二、「史学、史家与時代」『幼獅月刊』三九―五、「近代紅学的発展与紅学革命」『香港中文大学学報』二―一、「関於紅楼夢的作者和思想問題」『中華月報』七〇五、「何以必須学術自由」『明報月刊』一〇〇、「章学誠的六経皆史説与朱陸異同論」『新亜学術年刊』一六、「戴震的経考与早期学術路向」『銭穆先生八十歳紀念論文集』、「戴東原与伊藤仁斎」『食貨』四―九、以上一九七四、「戴震与清代考証学風」『新亜学報』一一―二、「略論清代儒学的新動向」『中華月刊』七二三、一九七五、「清代思想史的一個新解釈」『中華文化復興月刊』九―一、「反智論与中国政治伝統」『明報月刊』一二二～三、一九七六。

② 島田虔次「歴史的理性批判――『六経皆史』の説」(『岩波講座哲学4』、岩波書店、一九六九)、拙稿「同時代人の眼――章学誠の戴震観」(『中国哲学史の展望と模索』、創文社、一九七六所収) 参照。

(A5判　一二頁＋三七三頁　一九七六年九月　香港・龍門書店)

(和歌山大学経済学部助教授)